

# 労協連だより

## 古村伸宏（日本労協連・事務局長）

いよいよ総会まで1ヶ月を切り、総会からその後の活動へと思いは先走り始めている。各地の加盟団体も、連合会総会の議案を受け、自らの存在を問う歴史的な取り組みへと歩みを進めることになるだろう。

日本の労協運動は、失業者の仕事確保を根としながら今日まで試行錯誤の発展を遂げてきた。今の時代は、まさに「労働」の価値、「失業」が生み出す様々な人間的・社会的退廃を突きつけられている。この時代に「協同労働」の「仕事おこし」が注目を受ける必然性はもはや誰も否定できない。しかし、いくら理論的・制度的な支えがあったとしても、実践する人々に「協同労働」の実感が備わっていかなければ、この運動は飛躍していかない。この実感がまだ「本物」と呼べるだけの量・質を備えていないのが率直な実情だろう。しかし、一部研究者の中には、ここ数年、特に介護保険施行後の労協運動の歴史的な転換の始まりに触れず、労協を論じる人々がいる。誤解を恐れずにいえば、約20年この組織に身をおいてきて、この3年間ほど劇的かつ本質的発展をした経験はない。それだけ実践の成熟と時代のニーズ、つまり新しい参加者のパワーが育ち発揮したといえるだろう。参加者の力が発揮されているかどうか、が協同組合運動の生命線であり、そのパワーを集めることで、協同組合は息づく。事業高や組合員数、加盟団体数からは推し量れない前進を体感する人々は確かに広がっている。

社会の病巣が広がる一方で、人が人を大事にする、気づかい支え合い刺激しあう「ケア」の価値が強まっている。これは単なる「福祉」

や「介護」に特化されたものではない。いわば人間存在に根ざした課題でありテーマである。「ケアする動物」である人間の営みは、もう1度ケア力を呼び覚ますことが求められている。「ケア」とは「協同」と同義とも言える。ケアも協同も、1人ひとりが主体であり客体であるという自覚を促すものではないだろうか。それは誰もが社会の「当事者」であり、それゆえ考え、悩み、他者と触れ合いながら主張するのだと思う。協同組合とは、この当事者性に価値をおく組織だ。ここを蔑ろにした時、人も協同も組織も形骸化する。介護・福祉という部分的捉え方ではない、「地域福祉事業所」という発想から運動・事業を組み立ててきた結果が、人間・地域を丸ごと捉え、当事者性を強めてきた結果といえる。これが、劇的かつ本質的発展の中核である。

色んな人々が、自分の人生模様の中で、「協同労働」を哲学とし、「仕事おこし」をライフワークとしている。もはやライフワークは、本職を終えた老後の営みではない。人生における仕事が真正面からといわれる時代がきている。

手に残り心に刻まれる実感とは、「仕事おこし」の達成感と、ともに苦労した仲間がいることへの感動である。是非研究者の方々も、総会に足を運び、へんかを。共有していただきたい。総会のテーマは「わきおこれ！仕事おこし・協同労働の奔流」である。奔流＝激しい流れのごとく、圧倒的な当事者・共感者の広がりや深まりを生む息吹を、社会的エネルギーにしていく挑戦を始めたいと思う。これが結集軸として問われる総会に。